

第六章：君子の道德「五倫」思想

日常我々がある事柄を行う際に、人格・業績共に完全無欠を要求されたりすると、「聖人君子ではありませんので・・・」などと自己弁護します。このように、一般的には「聖人」は「君子」と合体して「聖人君子」と称して使われ、「知徳が最もすぐれ、万人が仰ぎ師表（師として手本になる人や事柄）とすべき人」（広辞苑）の意とされます。

「論語」では「聖人」と「君子」を明確にランク分けしています。「論語」に「**始め有り^お卒^はわり有る者は（徳・才すべてが完備しているのは）それ唯^ただ聖人か**」（子張篇）とか、「**聖人は吾れ得てこれを見ず。君子者を見るを得ば、これ可なり**」（述而篇）とあるように、孔子は「聖人」が人間的に才徳完備の人で、それは現実的には存在しないので、君子者なる者に会えば十分だと考えていたようです。すなわち君子の目指すべき理想的究極の人物像が「聖人」である、と考えればよいと思います。

そこで「君子には三つの畏れなければならないものがある。一つは天命であり、二つは大人であり、三つは聖人の言葉である」（季子篇）と言って、「君子」の師表が「天」であり「大人」「聖人の言葉」であるとしています。「天」とは「天命」のことで人知の及ばぬ運命や使命のこと、「大人」とは有徳の極致としての君子すなわち「聖人」、そして過去の書物に残る「聖人たちの言葉」。孔子は弟子達に、それらを手本として自己研鑽を重ねて立派な君子となり、社会のリーダーとして活躍し、社会の^{ぼくたく}木鐸（八佾篇にある言葉）となって世人を覚醒させ、後人を勸戒（善を勧め悪を戒める）する人物になれと、「論語」約五十五章の至る所で君子たる者の心得を述べています。「論語」はある意味では全編が「君子論」である、と言っても言い過ぎではありません。

孔子は又、「生まれながらにしてこれを知る者は上なり。学びてこれを知る者は次なり。^{くる}困しみてこれを学ぶは又その次なり。困しみて学ばざる、民これを下となす」（季子篇）とか、「中人以上には以て上を語ぐべきなり」（雍也篇）「唯^{じょうち}だ上知と下愚とは移らず」（陽貨篇）といって、「上知」「中人」「下愚」など人品の等級にランク付けをして、生まれつき物をよく知る「上知」すなわち天才にはなれなくても、自ら進んで学ぶ第二番目の人か或いは何か事に行き詰ったら熱心に学問する第三番目の中人以上の人になれとも言っています。そして「**我は生まれながらにしてこれを知る者に非ず。古を好み、敏にして以てこれを求めたる者なり**」（述而篇）と述べ、自分自身を第二番目の「**学びてこれを知る**」属類に位置づけています。私は凡人だが、人一倍熱心に努力する君子者である、と。

先生が言われるには、「聖人だとか仁徳者だといわれるには私などとても及ばない。ただ、その道を目指して厭わず、人を教えて倦まない者だと言ってもらっても宜しかろう」と。（述而第七の三十三）

余談になりますが、中国には「二十一史」と称する古代から元に至るまでの国家認定の正史があります。古い順にあげれば、「史記」「^{かんじょ}漢書」「後漢書」「三国志」「晉書」「宋書」「南宋書」「梁書」「陳書」「魏書」「北齊書」「周書」「隋書」「南史」「北史」「新唐書」「新五代史」「宋史」「遼史」「金史」「元史」です。これに「^{くとうしよ}旧唐書」「旧五代史」「明史」を加えて「二十四史」、さらに「新元史」を加えて「二十五史」などとも呼ばれています。

「史記」に次いで二番目に古い「^{かんじょ}漢書」は後漢の班固が撰し、妹の班昭が天文志を補筆して成った後世歴史家の模範となった編年体の断代史です。この「漢書」に「古今人表」という篇があって、過去の歴史上の人物を上上、上中、上下、中上、中中、中下、下上、下中、下下の九等に分類して実名を挙げたものが載っています。いままで本書で取り上げてきた人物に絞り、一部ピックアップして次に掲げてみます。

上の上（聖人）・・・炎帝、黄帝、堯帝、舜帝、禹王、湯王、文王、武王、周公、孔子

上の中（仁人）・・・伊尹、伯夷・叔齊、微子・箕子・比干、古公亶父、管仲、子産、晏子、蘧伯玉、顔回・仲弓・冉伯牛等孔子門人、子思、孟子

上の下（智人）・・・関龍逢、鮑叔牙、弧偃・趙衰、葉公、子路・子貢・冉有他孔子門人

下の下・・・鯀、紂王と妲己、幽王と褒姒、衛靈公と南子、夏姬、驪姫、陽虎

尚、晉の文公、秦の穆公、老子、長沮・桀溺、孟献子、韓非子等は中の上、齊の桓公、孫子は中の中、齊の景公は中の下となっています。

「賢者とは善を^{あらわ}顯し悪を^{あきら}昭らかにし、後人を勸戒することにある」としているのが「古今人表」における人物選定上の立脚点ですが、孔子が聖人とされ、孔子の弟子たちの殆どが「上の中」以上で、齊の桓公や晉の文公に勝る評価を受け、老子や孫子、韓非子などの点数が低いのは、あまりにも儒家偏重の人品評価表である嫌いはありますが、正史にこのような記事が載っているのが面白いので紹介してみました。後年、この表の影響もあってか、孟子や顔回は聖人に次ぐという意味の「^{あせい}亜聖」と呼ばれるようになりました。

閑話休題。話を本筋に戻しまして、「君子論」に入っていくことにしましょう。もともと「君子」とは、身分のある男子で支配階級に属する人たち、すなわち貴族の男子のことを指したそうですが、のちに立派な人格者や、身分は低くとも徳の完成を目指して励む男子一般の通称となったようです。もっとざっくりばらんに言うなら、男子たるもの、リーダーたらんと欲するものとか、いっばしの成人男子ならという「男らしさ」を強く感じさせる響きのある言葉です。「論語」で「志士仁人」とか「成人」と言う場合も君子の別称と考えていいだろうと思います。では、改めて孔子に問う。君子の使命や役割とは何か。

子路「先生、君子の心がけや役割は何ですか」

孔子「自分を磨いてつつしみ深くすることだ」

子路「それだけでいいんですか」

孔子「自分を磨いて他人を安らかにすることだ」

子路「それだけでいいんですか」

孔子「自分を磨いて万民を安らかにすることだ。これは聖天子の堯・舜でさえ苦労された難事だ」（憲問第十四の四十四）

これによれば、君子の任務とは、政治論で述べた為政者の役割・使命と同様、「己を脩めて以て人を安んずる」「己を脩めて以て百姓を安んずる」ことが究極の目標になります。「^{じん}終分立用」すなわち、自分の分を尽して他人の役用に立とうとする利他主義の実践が、君子たる者が目指す至善の極致です。ではその究極の目標や至善の極致を達成するためにはどうするか。

子曰わく、道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶ。（述而第七の六）

（先生が言われるには、「（君子たるものは）人が人たる先王の道の実現を目指し、徳を根拠として、仁にぴったり寄り添って離れず、礼・楽・射・御・書・数の六芸を自家薬籠中のものとして憩い、人間の巾を広げたいものだ」と）

先ずは君子たるもの、正しい道すなわち「人が人たる先王の道の実現」を強く志す必要がある。孔子が子夏に言った。「お前は君子の儒者となれ、小人の儒者となってはいけない」（雍也篇）と。又、「君子ならば大受せよ（大きな任務を引き受けよ）」（衛霊公篇）と。そして「君子は、世を没れるまで名の称せられざるを病む」（同）すなわち生前になんらかの名誉を得ぬようではダメだ、と。そのためには始めから大きな志を立てることが肝要である。孟子も「志は気の帥なり」（公孫丑上篇）といい、^{みん}明の大儒で政治家の王陽明がそれを引用して「伝習録」の中で、立志の重要性を次のように述べました。

<そもそも孟子が「志は気の帥なり」というように、志は気力の統率者である。人の命である。木の根である。水の源である。源が深くなければ流れは止む。根をよく植えないと木は枯れる。生命が続かなければ人は死ぬ。このように志が確立しないと気力は衰えて不活発になるのである。だから君子の学は如何なる時も、如何なる場合にも、志を立てることを本務とせねばならない。（中略）怠る心や傲慢の心等が起きた場合は、この立志に立ち返り、志を以て悪心を責め、再度志を奮起することによりそれ等を矯正することができるのだ。（弟に示す立志の説）>

^{ぜんゆう}冉有が言うには、「先生の目指される道を学ぶことを嬉しく思わないわけではありません。ただ、自分の力が足りないのです」と。子曰わく「力が足りないというのは、やるだけやって途中でやめるのを言うんで、今、お前は自分から見切りをつけてしまっている」と。

(雍也第六の十二)

「政事には冉有」といわれた「孔門の十哲」の一人である冉有が、孔子に発破をかけられている場面です。冉有は「孔子家語」によれば孔子より二十九才若い、才徳兼備の勤勉実直な君子で、季氏の邑の宰（長官）を務めるエリート官僚でした。有能ではあったが気が優しく弱い性格が難点でした。季氏の傲慢で僭上な政治に歯止めをかけることができず、孔子に度々叱られ、先の章で述べたように季氏が周公より富んでいるのにさらに領民から収斂して、「吾が徒に非ざるなり」（先進篇）と退けられています。

「孔門の十哲」とは、先進篇に「德行には顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓、言語には宰我・子貢、政事には冉有・季路、文学には子游・子夏」と挙げられた孔子門下の十人の高弟をいいます。その中でも孔子は暴虎馮河（無鉄砲）な子路を別とすれば、特に才能溢れる冉有や宰我を一番叱っています。有能で仕事を無難にこなすが高い志に欠ける、と。

孔子は「真の中庸を得た人材と交わりたいが、そんな人はそうザラにはいない、それならせめて大志を抱いて前へ前へと進もうとする『狂者』や、どんな時でも節義を堅く守ってやってはいけないことをやらない『狷者』と付き合いたい」（子路篇）と言っています。

子曰わく、後世畏るべし。焉（いづく）んぞ来者の今に如かざるを知らんや。四十五十にして聞こゆること無くんば、これ亦畏るるに足らざるのみ。（子罕第九の二十三）

（先生が言われるには、「後世（青年）は恐るべきだ。どうしてこれからの若者たちが今の我々に及ばないといえようか。ただ、四十五十になっても評判が立たぬようでは、それはもう恐れるに足らずだ」と）

しっかりした正しい立志が固まったら「徳に拠り、仁に依り」行うこと。徳とは道徳のことで、「徳は孤ならず、必ず鄰り有り」と里仁篇にあるように、人が社会に処していく上で、同類を周辺に寄せ集め感化する力とでもいったらよいでしょうか。そして徳には善徳と悪徳がありますが、「徳に拠り」は当然「善徳に拠る」ことですから、本書では先ず善徳の代表である仁・義・礼・信・智の五徳を考察していくことから始めていきます。

尚、「論語」で「五徳」という場合は、「温・良・恭・儉・讓」（学而篇）を指す、とする人もいますが、皆な仁・義・礼・信・智という五大徳目の細目に相当すると考えられますので先の分類で話を進めることにいたします。又、孔子は五徳を仁で代表させた表現をとっただけで、仁だけに依りかかれといったわけではないことも付け加えておきます。

【仁について】

「仁」は孔子学派の最重要視する徳目です。従って先述した通り、「徳に拠り、仁に依り」を「諸徳の特に仁に依りかかって」と訳される先達もあるくらいです。「論語」五百章中の

約六十章、百回以上にわたって「仁」という言葉が頻出します。では仁とは何か。

実はひとことでズバリ表現しがたい「愛に関する概念」で、孔子自身も人を見て色々な角度から法を説いているので、定義付けするのは難しい作業です。「論語」に雑然と投げ出された言葉を拾いながら私流に解釈していきましょう。

因みに「論語」研究大家の諸説の一端を列挙してみると、後漢の鄭玄^{しやうげん}は、「仁とは相人耦なり」、と言って、人と人がお互いより添って親しみあう意、唐の文人韓愈^{あいにんぐう}（韓退之）は「博愛これを仁という」、朱子（朱熹）は「仁は愛の理、心の徳なり」、伊藤仁斎は「慈愛の徳の、遠近内外に充実通徹して至らざる所の無いのを仁という」（「語孟字義」）、荻生徂徠は「仁とは、人に長とし民を安んずるの徳なり。先王の道は民を安んずるがためにこれを設く」（「論語徴」）などなどとなっています。これらの説を総て含んだのが仁の概念とも言えるし、仁という巨室の天井をそれぞれが葦^{よし}の髄から覗くような解釈であるともいえます。孔子の言葉で言えば次の二章の言葉が一番仁とその波及効果を表しているように思えます。

子貢が言うには、「もし人民に博く施しができて、多くの人を救えたら仁と言えますか」。子曰わく「どうしてどうして、仁どころではない。それこそ聖と言うべきだろう。堯・舜でさえそれを悩みとされたくらいだから。そもそも仁者というのは、自分が立ちたいと思えば他人を立たせてやり、自分が達したいと思えば他人を達してやる。いわば恕^{じよ}（思いやり心）があること、それが仁の方法だ」と。（雍也第六の三十）

子張が仁について孔子に訊ねた。子曰わく「五つのことを天下に行うことができたなら仁といえるね」。子張がさらにその細目を訊ねた。子曰わく「恭・寛・信・敏・恵だ。恭しければ侮られず、寛大であれば人望が得られ、信があれば人から頼られ、機敏^{きびん}であれば仕事の成果が上がり、恵み深ければ人を上手く使えるものだ」と。（陽貨第十七の六）

先に述べたように、孟子は「惻隱^{そくいん}の心」を「仁の端（芽生え）」と言いました。孔子はこれを「恕^{じよ}」すなわち、「己の欲せざる所、人に施すことなかれ」（顔淵篇、衛霊公篇）と言いました。相手を思いやる心が仁の第一段階です。そして第二段階は、「恭・寛・信・敏・恵」といった諸徳を実践躬行することにより、自然と他人に好影響を与え、最終的には皆なに慕われ、聖人のような大徳大知で万民を救済博施することはできないにしても、少しでも多くの人に役立つ人になる。仁とはこのように、「身近なところから自分の身に置き換えて相手を思いやり、善行を積み重ねていくうちに、自然と他に及ぼす好影響又は愛」と定義付けられないだろうか。それは身近な家庭や友人との和合から始まり、遂には職場・地域・社会へと伝播していく。人と人が暮らしていく上で原点となる愛の徳である、と言っているのでしょう。

では、仁はどうしたら身につけることができるか。孔子は「仁は遠いものではない。仁

を欲すればすぐにやってくる」(述而篇)と言い、子夏は「博く学びて篤く志し、切に問い、近く思う、仁その中にあり」(子張篇)と孫弟子に言っています。もともと孔子の思想は非常に現実的で、所謂西洋哲学などのような形而上学的抽象概念は殆ど見られません。先進篇の次の文章を一読すれば了解するはずで

子路が神靈に仕えることを訊ねると、孔子は「未だ人に仕えることもできないのに、どうして神靈につかえられよう」と言い、死について訊ねると「未だ生を知らず。どうして死がわかろうか」と答えた。(先進第十一の十二)

憲問篇に孔子が自分のやりかたを「下学して上達す」といい、「中庸」に「子曰わく、道は人に遠からず。人が道を為して人に遠いものなら、それは道とはいえない」とあるように、仁の道も、先ずは家族や親族そして近隣、職場などへの日用卑近なことから始め、その中で「博学篤志、切問近思」して上達し、それを段々広く社会に推し及ぼしていけばよい、とするのが儒家思想の根本概念です。

ただし、相当な覚悟を以てやらないと仁者にはなれない。君子たる者が名を成すに当っては、富貴貧賤には関係ないが、仁徳を去っては名誉を全うすることはできないので、「君子は食事をとるあいだも仁から離れず、造次・顛沛(慌しい時や危急の時)にも必ず仁から離れない」(里仁篇)ことが大切で、「仁を行うに当っては、師にも譲らず」(衛霊公篇)の精神でやりなさい、と孔子は教えています。仁は近くにあって、しかも身に体するには不断の努力を重ねることが欠かせない愛の徳です。すなわち君子、士、志士仁人は、仁を以て周囲の人々に好影響を与えることを己の使命・役割と意識し、体を張って仁を実践する必要がある。

顔淵が仁について訊ねた。子曰わく、「克己復礼が仁である。すなわち自分の私心に打ち勝ち、礼の精神に立ち返ること。特に上に立つ者が己に克ち、礼に復れば天下は仁に帰す。仁を為すのは自分の心がけ次第。相手がどうのという問題ではない」と。(顔淵第十二の一)

曾子が言うには、「士たる者は弘毅(度量が広く意志強固)でなくてはいけない。任重くして道遠し。仁を以て己の任務とする。なんと重いじゃないか。死して後已む。なんと遠いじゃないか」と。(泰伯第八の七)

子曰わく、「志士仁人は、命惜しさに仁を害するようなことはしない。時には命を捨てても仁を成し遂げる必要もある」と。(衛霊公第十五の九)

ではどんな人が仁者に近く、どんな人が仁者に遠いか。孔子が言うには、「剛毅木訥仁に近し」(子路篇)「巧言令色鮮し仁」(学而篇)と。意志が強く、飾り気なく、口数少ない

のは仁者に近く、べらべら喋り、媚^こび諂^{へつら}うようなのは仁者でない。孔子は特に佞^{ねい}者^{じや}すなわち諂^{へつら}い者を嫌いました。又、「郷^{きやう}原^{げん}は徳^{とく}の賊^{さく}なり」(陽貨篇)と言って、郷原(うわべだけ仁者を装う者)を「紫^しが朱^{しゆ}を奪^うう(朱は正色、紫は間色)」(陽貨篇)「似^にて非^ひなる者」(「孟子」・尽心下篇)として惡^{にく}みました。そして君子たる者、志士仁人たる者は「聞^{ぶん}者^{しや}」ではなく「達^{たつ}者」になれ、と。

子張「先生、どうしたら我々も達者になれるか」

孔子「君のいう達者とは具体的にはどういうことか」

子張「はい、一国においても必ず聞こえ、一家中でも必ず聞こえることです」

孔子「それは聞^{ぶん}とって、有名であることで、達者ということとは異なる。そもそも達者というのは、素朴で正義を好み、相手の言葉を察して表情から感情を読み取り、相手の身を慮^にって謙虚であることで、それができれば一国、一家中でも達者たりうる。聞者というのはただ有名人であるということ、うわべは仁者を気取りながら、言っていることとやっていると違^{ちが}い、しかも有名の名のもとに平然とあぐらをかいて何の疑いももたない。それは一国、一家中でも聞こえはあるさ」(顔淵第十二の二十)

有名人必ずしも達者すなわち仁者ならず。いずれ時がそれを証明するはずだ。「莊子(逍遙遊)」にも「名は実の實(実際の徳が先で名誉は後)」とあるように、実際の徳があつてはじめて名誉がこれに伴うもので、人間として大切なことは、虚名が他人に知られることより、少しでも真の仁者たらしとすることだ、真の仁者は必ずいつかは実の名を以て知られるはずだ、といっているのです。

顔淵篇に、「君子は人の美を成す。人の惡を成さず。小人は是に反す」という言葉があります。君子たる者は、他人の長所や善行は後押しして尊敬・支援し、逆に他人の欠点は補いかつ惡事を為さしめぬよう関わり、他人の長所を嫉み善行を誹謗したりせぬ仁徳くらいは持ちたいものです。仁についてはまだ語るべきことがたくさんありますが、一応このくらいにしておきます。

【義について】

「義は宜^ぎなり」と「中庸」にあります。すなわち義とは、その時の宜^{よろ}しきに従っていくことである、ということです。すなわち「道理。条理。物事の理にかなったこと。人間の行うすじみち」(広辞苑)のことを義といいます。又、「礼記」(楽記篇)に、「仁は楽に近く、義は礼に近し」とあります。情緒的な和を人間社会にもたらず仁は楽と関連深く、規制的節度により和をもたらず義と礼は関連深い、といっているのです。

ところで義は、もともと五倫思想に「君臣の義」という如く、主として「君臣間の宜しきに従う道」であり、「礼儀に適う道」を指したようです。微子編に、子路が孔子のお供をされていて遅れたことがあって、杖の先で籠を荷った老人に出会った話が載っています。

子路「うちの先生をみかけませんでしたか」。老人「手足も動かさず、五穀の作り方も分からぬ男が先生かい」。そう言うと、老人は杖を立てかけて黙って草を刈りはじめた。子路は只者ではないと、敬意を払って手を組み合わせて立っていた。やがて老人は子路を引き止めて泊まらせ、鶏を殺し黍^{きび}めしをつくって食べさせ、二人の子供にひきあわせた。

翌日、子路が孔子に追いついてその一部始終を話すと、孔子は「隠者」だといい、もう一度子路に引返させた。家につくと老人は既に出かけて留守だったので、子路は子供に次のように伝えて欲しいと言が残した。

「あなたは隠者となられて、現在国家に仕えていないので『君臣の義』はないが、『長幼の節』については、子供さんたちを見ればキチンと教育されているところから、決して無視されてはいない。すなわち、五倫の道の重要さを理解されている。それならなぜ『君臣の義』を廃されるのか。御自身の身を潔くせんとして、人としての大倫を乱しているのではなかろうか。君子が国家に役人として仕えるのは、その義を行うためである。今の世の中が道の行われない世であることは十分わかっての上です」と。(微子第十八の七)

世の中が乱れ、道が行われないからといって隠者になるのは間違っている。五穀を育てる役割は農民がやることで、我々は政治に関わるものとして、人倫の筋が通った世の中にしようと理想の実現に尽力している。「君臣の義」「長幼の節」等を復古すべく歴遊して道を説き続ける、それが我々の役割であり態度である。そう言いたかったのだろうと思います。

里仁篇に「子曰わく、君子が天下のことに対するには、主観的な好悪を持たない。ただ義に適うかどうか比べて従う」とあります。典型的なのが、伯夷と叔斉が、いかに暴虐たる紂王であっても、殷王朝の臣下たる武王が武力で討伐したのは「義に非ず」として周粟を食らわず餓死した故事です。又、春秋の覇者である斉の桓公が、衰微したとはいえ周王朝を尊んで晉と和解させ秩序を保ったり、晉の文公が狐偃^{こえん}の献策を容れて周の襄王の地位を安定させたなどは、「君臣の義」を行った好例です。

「春秋左氏伝」に「大義親^{しん}を滅す(大義のためには肉親を捨てるのもやむをえない)」の典故となった、衛の大夫・石碚^{せきさく}の義話が載っています。これも「直窮」の事件同様、事の是非を現代流に論議すれば評価が分かれるところでしょうが、当時にとっては「君臣の義」を守った好個の事例です。紀元前七百二十年頃の話です。

<衛の莊公は正夫人の莊姜^{そうきやう}に子供がなかったので、陳から夫人を迎えたがその子供も死

んだのでその侍女に産ませた。莊姜はこの子を我が子として育てた。後の桓公である。ところで莊公にはもう一人愛妾に生ませた子がいて州吁しゅうくといった。乱暴者であったが莊公は州吁しゅうくを殊更可愛がった。夫人の莊姜が憎み、太夫の石碯せきぎやくが心配して莊公を諫めたが莊公はとりあわなかった。その上自分の息子の石厚までが州吁に取り入るようになり、桓公が皇太子となるや石碯は隠居を願い出た。やがて莊公が崩じ桓公が即位した。

十六年後心配したお家騒動が起こり、州吁が桓公を弑して即位した。だが民を和することができない。そこで側近の石厚に対策を相談した。石厚は考えあぐね父親の石碯に聞くと「周の天子にお目見えしたらよい」と教えた。どうしたらそれができるかの息子の問に、石碯は、「陳侯にその斡旋を頼め」という。そこで州吁と石厚は陳に向かったが、石碯は先に陳に使いをやって、「貴国を訪問する二人は、主君を殺した反逆者故かまわず処分されたい」と通知しておいた。二人は捕らえられ処刑された。

当時の識者曰く、「石碯は純臣なり。州吁を惡にくみ石厚が自分の子であるのに容赦しなかった。大義しん、親を滅すとは、それこれを言うか」と。>

義がもともと「君臣間の宜しきに従う道」であるとして、上位者である君に対して下位のものが忠実であること、まして上を犯すことは非礼であるという事例を挙げましたが、本来「宜しきに従う」とは「君臣お互いが礼儀に適う道を行うこと」を指すといった方が原義に近いと思います。人間である以上お互いが人として宜しきに従う道、それが義です。

これも「春秋左氏伝」や「孟子」に載っている話ですが、晏子の仕えた齊の景公が沛という地で狩をした時、虞人（狩場の役人）を招くのに弓を以てしたところ来なかった。景公がこれを捕とらえさせようとししました。すると虞人が言うには、「昔、我が先君の狩するや、旗で大夫を招き、弓で士を招き、皮冠で虞人を招かれました。それが礼です。私は皮冠で招かれておりません。礼に適っておりませんでしたので敢えて進みませんでした」と。景公は虞人を許した、というのです。

八佾篇に孔子が定公に君臣間のあり方を問われた時に、「君、臣を使うに礼を以てし、臣、君に事えるに忠を以てす」とありました。臣側も君主が非礼の場合は「礼に適っていない故、義にあらず」とするのが義人であることになるのです。臣が忠であるべきなのは、君が礼遇することが前提条件になる、といってよいでしょう。現代の組織人に改めて味わって頂きたい言葉です。

「論語」はさらに「孔子は自分が義を聞いてそれを実行できないのを内心警戒している、と言った」（述而篇）と述べ、「義を見て為さざるは勇なきなり」（為政篇）ともいって、義心があっても勇がなければ義の実行がなされぬことをナンセンスとしました。だから孔子は、井戸端式無責任会議を忌み嫌ったようです。「先生が言われるには、一日中大勢で集まって、結局何も義の話に至らないで、猿知恵だけ働かせるだけとは困ったもんだ、と」（衛靈公篇）

義は口先だけでなく実行する勇を必須の付帯要件とする。一方で、子路が「君子は勇を尊びますか」と訊ねた時、「君子は義が第一で、君子に勇があっても義がなければ乱を為すし、小人に勇があっても義がなければ盗みを為す」(陽貨篇)と答えています。要するに、間違えやすいのは、義と義侠心の違いです。日本のヤクザがそれで、勇があっても義の基準が狂うと大義も大偽となってしまいます。秦の始皇帝暗殺を狙って失敗した^{きょうかく けいか}刺客・荊軻の例をとってみましょう。「^{しやうしやう}風蕭蕭として易水寒し 壯士一たび去れば復た還らず」で有名になったこの話の経過は「史記・刺客列伝」によれば、ざっと次の通りです。

＜荊軻はもともと衛の国の人である。読書と剣術を好み、衛の君主に建言したが受け入れられず旅にでた。歴訪した諸国で荊軻はその地の賢人・豪傑・長者と親交を結んだ。燕国に赴くと在野の賢人・田光先生の知遇を得た。

荊軻が燕にいるとき、秦国の人質となっていた燕の太子の丹が逃げ帰ってきた。丹はもと後秦の始皇帝・政と幼友達だった。ところが長じて秦の人質となり、自分に対する政の冷遇を憎み、又、いずれ破竹の勢いの秦に小国・燕が乗っ取られることを憂えて、報復の念に燃えていた。太傅(もりやく)の^{きくぶ あなど}鞠武は侮られた恨みくらいで、秦の^{げきりん}逆鱗にふれるのはいけないと諭したが丹が聞き入れず、やむなく田光先生を紹介した。

誰にも他言するな、と念を押され^{たいしたん}太子丹の話しを聴いた田光先生はもう私は年老いました、というわけで荊軻を推薦した。国の一大事と平身低頭して懇願する丹への情にほだされ、田光先生は荊軻に一部始終を伝え、荊軻は承諾し、田光先生は他言せぬ約束を果たすために自分の首をかき切って自刃した。荊軻は上卿に挙げられ、豪邸を賜り、太子丹自らの馳走攻めにあい、妙宝・車馬・美女とあらゆる機嫌取りを^う享けた。最早田光先生の自刃への忠誠も併せ、荊軻が引き下がる状況ではなかった。かくして秦の始皇帝暗殺計画は任侠・荊軻にとって「正義の御旗」と化したのである。が、結果は、暗殺は失敗して荊軻は捉えられ燕は滅びた。＞

後年荊軻の義気に感じ、陶淵明が「其の人已に没すと雖も 千載余情あり」と嘆じたり、^{らくひんおう むかしびと}駱賓王が「昔時人(荊軻)已に没し、今日水猶お寒し」と感慨に耽ったことは有名なこと。男気のある義理人情の世界を描く荊軻伝は幾多の人の同情の涙を誘いました。だが司馬光「資治通鑑」(秦紀・二十五年の論贊)は痛烈な批判を浴びせます。

「荊軻は厚遇を受けたという私的な恩義に感ずるのみで、自分の親族のことも顧みず、^{あいくち}短い首ひとつで燕のために始皇帝を刺し殺そうとして失敗した。愚かなことではないか。楊子は荊軻の死を『刺客の死』といい、『荊軻は、君子これを盗賊とす』といっているが、まことにその通りだ」と結んでいます。弟子の有子「信(約束を守ること)も義と結びついてはじめて確かなものとなる」(学而篇)と言っていますが、何が義かを誤ると義は自己都合の錦の御旗化してしまいます。今日の社会的事件も、これに類するものが後を絶ちません。警戒、警戒です。

最後に、「君子は義に喩り、小人は利に喩る」(里仁篇)「成人は利を見ては義を思い、危うきを見ては命を授ける」(憲問篇)「士は危うきを見ては命を投げ出し、利得を見れば義を思う」(子張篇)とあるように、義と相表裏して語られるのが利です。これについては政治論を述べた前章で縷々触れました。すなわち「利に^よ放りて行えば、怨み多し」(里仁篇)です。国家間や国内のあらゆる組織間、家庭の中に至る総ての人々が^{こもごも}交々に利を求めあえば、お互い奪い合いをせざるを得ません。そこに争いが起こり、家庭、組織、国家が崩壊するだけです。

孔子自身は「富というものが追及してよいものなら、執鞭の士(鞭をとる露払い)のような卑しい仕事だってする。そうではないと思うので私の好きな道に向かうのだ(述而篇)」と、弟子に語っています。孔子は長い人生を通して大局的にみれば、「死生命あり、富貴天にあり(顔淵篇)」で、人生には人知を超えた天の命があり、富貴貧賤などといったことも自分が欲するようにはいかない、利だ利だと騒いでみたところで富裕になれるわけではない、結局大切なことは人間正直に生きることだという人生観に達していたようです。義は宜、すなわち直です。ギリシャ神話に登場する正義の女神「テミス」のように利と義を天秤にかけ、適う限りの義を選択して生きるべきだ、と。

子曰わく、人の生くるは^{なお}直ければなり。これを^し罔いて生くるは、^{さいわい}幸にして^{まぬが}免るるなり(雍也篇)

孔子曰わく、「人間が生きてゆくのに最も大切なことは、正直であること。不正直者が一時的に成功しても、時期が至ればきつといつかは天の鉄槌が落ちるものだ。正直に生きよう。うわべを飾り他人をごまかして^{いつとき}一時的にものごとがうまくいったにしても、時至れば白日のもとに^{さら}曝され、人々の信頼を失い、あるいは罰せられ、あるいはお里が知れたりしてしまう。何よりも正直であることは、自分の良心に忠実に生きることだから、心はいつも晴天白日のごとく明朗爽快だ。やましいことがないから他人に卑下せず自信をもって生きていける」と。まさに、「義は百事の始め、万利の本なり」(呂氏春秋・無義篇)です。

司馬牛「先生、君子についてお訊ねします」

孔子「君子は憂えもせず、懼れもしない」

司馬牛「憂えず、懼れなければ君子といって宜しいのですか」

孔子「内に省みて^{やま}疚しくなければ、一体、何を憂え何を懼れることがあろうか」

(顔淵第十二の四)

【礼について】

「礼」というのは、社会秩序を保つための法律・制度・儀式・作法・生活規範などの総称で

す。社会的身分に応じた細かい規定があって、それを守り行うことにより社会的調和が保たれるとしました。「礼儀三百、威儀三千」と「中庸」に記述される礼の細則は、「三礼」と呼ばれる「周礼」「儀礼」「礼記」に詳しく記され、儒家が非常に尊びました。

当初は神や靈魂といった人知を超えた畏敬すべき天地・自然に対する祭天の礼や先祖の御霊に対する宗廟の礼が重要視されました。それが、天に代わる天子や属下の諸侯にまで敷衍し、祭礼・葬式・朝儀へと広がり、さらに諸国間の会盟や饗宴、外交・接待の儀礼へと発展していったようです。次いでそれが卿大夫・士・庶民に伝わり、冠婚葬祭などの定めごとにもしかるべきルールが決められていったのでしょう。

竹内照夫著「四書五経」(東洋文庫版)に、「祭礼を重んじて敬虔の心を養い、独りを慎み人を尊ぶ態度を身につけ、これによって臣を良く使い、民を良く治めるということ、これが孔子の礼楽政治の基調である」と端的に礼の道徳的観念とその効用がまとめられています。礼は祭礼の儀式、お辞儀・作法という形式を通して、天や長上(目上、年長者)、他人に敬虔・敬意を表する心を育むと同時に、「慎独」といって誰も見ていない一人の時さえ、神の目が善人と悪人を見張っていることを自覚し、不善・怠惰・不遜に陥りやすい自分を律する役割をもっているということです。

結局の所、礼の目的は社会や人間同士の「和」をその効用としています。しかも「仲良しクラブ的和」に流れないための「引き締まった和」を形成するために。

有子曰わく、礼の用は和を貴しと為す。先王の道もこれを美と為す。(しかし)小大これ(和)によるも、(うまく)行われなことがある。(すなわち)和を知りて和すれども礼を以てこれを節(律)せざれば、(真の和は)亦た行われず。(学而第一の十二)

和は人間社会において最も願うべき善事であるが、ピリッと締まった和でなければならぬ。「君子は和して同ぜず。小人は同じて和せず」(子路篇)。和は晏子が景公に教え諭したように、異質・異位・異国の人間同士のハーモニーを奏でるものであり、付和雷同と混同してはいけぬ。それを「引き締まった和」にする道徳観念が「礼」なのです。「論語」には「礼を以て節する」とか、「これを^{ととの}斉えるに礼を以てす」「礼を以てこれを約す」などの、「節」「斉」「約」という言葉が礼と一対になってしばしば語られます。これらは総て「引き締める」という意味であると解釈してよいと思います。社会秩序を保つためには仁や和や諸徳を以て庶民を導く場合でも、自己を切磋する学問をするに当たっても礼は欠かせない。

顔淵が仁について訊ねた。子曰わく、「己に克ちて礼に^{かえ}復るのを仁という。上に立つ者が一旦克己復礼すれば、天下の人民は皆な人に帰すようになる。仁を為すのは自分次第で人によらない」と。顔淵がその要点を教えて欲しいと言ったので、子曰わく、「礼に外れたことは視・聴・言・動一切しないことだ」と。(顔淵第十二の一)

仁を為すには自分に打ち勝って、礼に外れたことは見るな聴くな、言うな行な、と孔子は言いました。そして「(臣下は)君に事えるには礼を尽くし」「君が臣下を使うには礼を以てする」(八佾篇)のが重要で、臣下には臣下としての、君には君としての礼儀があり、それぞれがそれを遵守・実践せねばならない、としたのです。こうして「臣を良く使い、民を良く治める」(竹内「四書五経」)のために秩序ある制度・儀礼の様式を定め、「引き締まった和」を実践躬行するのが礼の効用です。視聴言動すべて相手の五感を通して知られる自分を意識して締め、律する道德が礼である、といってもよいでしょう。

それが礼の効用として形式そのものを重んじ、「君子重からざれば威あらず」(学而篇)「これを望めば嚴然」(子張篇)といった「莊」すなわち上位者や君子たる者の莊嚴さや威嚴を演出することにも利用され、礼を尊ぶ理由の一つになったことは明かです。孔子は季康子のどうしたら人民が敬虔になるかとの問に、「これに望むに莊嚴を以てすればすなわち敬」(為政篇)と答え、衛靈公篇で、「仁徳を施しても莊嚴を以て望まなければ人民は敬さない、仁徳、莊嚴も礼がなければ人民は動かない」といっています。「礼」と「莊」の密接な相関関係を語っているのです。

しかしあくまでも礼の精神は、八佾篇に、「人として仁でなければ礼があったところで意味が無い」「礼は形式が豪華であるより寧ろ質素であれ」「御先祖のお祭りや神祭のときは御先祖や神霊がおられるような気持ちで行う」「礼を行いながら敬がなかったり、喪に臨んで哀しまないというのであれば、どこをみるというのだ、と孔子が言った」とあるように、畏敬すべきものへの敬虔や他人や物事に対する敬意・慎みの心が、礼の形式に付帯していなければ意味がない。そして「礼を尽くす」ことが大切で、礼の研究第一人者である孔子でさえ、分からないことがあれば「大廟に入りて事毎に聞き訊ねて万全を期した」(八佾篇)のです。かくして為政者や君子たる者は、「礼を知らざれば以て立つこと無」く(堯曰篇)「上が礼を好めば則ち人民は使いやすい」(憲問篇)ということに繋がるわけです。

ところが春秋時代には、最早礼は「引き締まった和」や「徳を伴った莊嚴・敬虔を演出する儀礼」ではなくなっていました。より上位者の行うべき礼式が下位の権力者によって執り行われたり、礼のもつ形式主義のみが残存したりしました。孔子伝の章で述べた、季氏が天子でもないのに八佾の舞を廟の庭で舞わせたのを孔子が大憤慨したのは前者の例で、「春秋左氏伝」に載っている次の馬鹿馬鹿しい故事が後者の形式主義による愚を物語っています。

＜ 魯の襄公三十年(紀元前五百四十三年)。宋の大廟で、「謔謔出出(あついあつい、でたいでたい)」と叫ぶ者があった。毫社で鳴く鳥の声も「謔謔(あついあつい)」というように聞こえた。五月甲午の日、宋で大火があり、宋の伯姫が死んだ。乳母の女官を待っていたからである。君子が言うには、「宋の伯姫の行動は、未婚の女性の道であって既婚の婦人の道ではない。未婚の女性は女官を待つのが礼のしきたりだが、伯姫のような既婚の婦人は

事の宜しきに従って臨機応変に対処するものだ、と。>

子曰わく、「先進（昔の先輩たち）の礼楽は野人的だった。後進（今の後輩たち）の礼楽は君子的で優雅で整っている。だが私は先輩たちの素朴な礼楽に従いたい」と。（先進第十一の一）

礼は又、外国交際の儀式には欠かせぬもので、しかるべき礼式や辞令を心得ていないと国君は勿論のこと臣下も外交官として隣国の会見や使者はつとまりませんでした。特に君子の必須教養としての「詩経」を完全マスターすることが礼執行上不即不離の条件だったのです。子路篇で「『詩経』三百篇を暗誦できたところで、外国交際にそれを臨機応変に駆使して対応できなければ何の役にもたたない」と孔子は言っています。宴会での饗応の際に「詩経」の引用が相手の心を捉え又時局を察知したものであったかどうかで、その人の人物評価に繋がりひいては交渉の行方を左右したからです。

又、執礼の際の辞儀の態度で人物の性格や栄枯盛衰を読まれてしまう場合もあります。「春秋左氏伝」の定公十五年（紀元前四百九十五年）の記事はその一例を物語っています。

<春、^{ちゅう}邾の隠公が来朝した。子貢がその交歓儀式に立ち会った。邾子は玉杯を執ること高く、その容（かたち）は仰ぐようだった。定公は玉を受けること卑く、その容は俯すようにして行った。子貢曰く、「礼を以てこれを觀れば二君は皆死ぬだろう。そもそも礼は死生存亡の体现である。（中略）今、正月にお互いが交歓し合いながら共に礼が適切を欠いている。心はすでに死んでいる。よいところが見えない。どうして久しいことがあろうか。邾子の高仰は驕慢だ。定公の卑俯は衰弱だ。驕慢は乱に近く、衰弱は病に近い。我が君・定公は主人役である。先に死ぬだろう」と。子貢の予言通り定公は夏に死に、七年後邾子は魯軍に攻められ幽閉された。>

郷党篇は或る意味で孔子晩年の小伝記ともいえる特色のある篇です。礼については八佾篇とこの郷党篇に一番集中して記載されています。郷党篇から孔子の言動を幾つか拾って実際の場面における礼執行の一端を箇条書的に紹介してみることとします。

孔子は朝廷で主君お出ましを待つ間に話す時は、下太夫とは和やかであり、上太夫とは慎み深く、主君お出ましの時はうやうやしくかつ威儀正しかった。

主君のお召しで接待役を仰せつかった時は、顔つきは引き締め、足取りはゆっくりした。並んでいる人に会釈する時は相手の向きによって手を左右に組み替えた。礼服をキチンと着こなし、前後が美しくゆれうごいた。小走りに進む時はスムーズに動いた。客が退出すると、必ず報告し「お客様は満足のご様子でした」と言った。

宮城の門に入る時は恐れ慎んだ表情で、主君の道である中央は避け、狭い所から入り、

敷居は踏まなかった。主君の座の前を通過する時は顔を引き締め足取りを緩めた。言葉遣いは舌足らずの如く無駄口を使わず、裾を持ち上げて堂に登る時は恐れ慎み、息を止めたように息遣いを潜めた。退出する際は一段降りると顔をほぐし、階段を降り尽くすと小走りに席に戻り恭しくした。

使者として主君の代理で圭^{けい}を執る時は、重々しくし、圭を上げる時は軽く会釈する程度で、下げるときはものを授けるくらいの高さで緊張しておののかんばかりだった。足取りは静々と摺足で規律正しく行った。

朝服には色のきまりが厳しく定められ、夏冬にそれぞれ着衣の仕方が決められていた。喪中の衣装にも定めがあり、葬式に参列するにも着衣の色が遵守された。月の朔日^{ついたち}は必ず朝廷の礼服をつけて出仕した。

潔^{ものいみ}齋する時は必ず麻布で作ったゆかたを揃え、普段と食事を変え、場所も変えた。

主君からのお召しがあると、車に馬をつなぐのも待たず出仕し、主君と一緒に食事する時は、先に毒見をした。座席は必ずキチンと整えてから座った。

車に乗るときは、必ず直立してすがり綱を握り、車中できょろきょろせず、大声を出さず、指をさしたりはしなかった。

その他孔子は大酒は飲んだが乱れなかったとか、時期ものでなければ食べなかったとか、好物は白米と魚肉でことに肉は大好きだったが色々細かなことに気遣った等々、日常の飲食に至るまで礼の実践を心がけていた孔子像が画かれています。これを読んでいると、斉の晏子が国情に合わずとして、景公に孔子の登用を反対した理由も分からぬではない気がします。現に魯国でも煩雑な礼の儀式は、要不要を鑑み、不要と思われる儀礼は廃止されつつありました。

子貢が、月の朔日^{ついたち}を宗廟に報告する「告朔の儀礼」がすでに魯国で行われなくなっているのを思い、その生^{いけにえ}贄にする羊をやめようとした。子曰わく、「子貢よ、お前は羊を惜しがっているが、私はそれよりその礼が廃ることの方が惜しい」と。(八佾第三の十七)

古聖賢の太平の世を復古したいと願う孔子には、昔から連綿と受け継がれてきた礼の儀式が日増しに廃止されていくのを見るに忍びなかった。儀式を廃止ということは、礼の精神そのものが廃ることを意味します。時代の変化に適応してゆく子貢と、古きよき時代を偲ぶ孔子。この文章には現代にも共通する何か深いものが訴求されている感じがします。礼の復活は孔子の理想とする「徳治主義」の重要な位置を占め、「論語」は礼に関する記事に、仁に次ぐ約七十章強を割いていることを付け加えておきましょう。

【信について】

君子が行うべき徳の代表格としての五徳を解説していますが、すでに仁・義・礼の三徳の概要を説明しました。次は「信」です。「論語」で使用される「信」は、信用・信頼そして忠と合体した「忠信」すなわち「まごころ」を加えた道德概念であると考えてよさそうです。先ず信用・信頼を意味する「信」については、前章の政治理念で縷々述べた通りです。孔子が「信」に対する重要性を述べた次の顔淵篇の言葉がその総てを語っていると考えるとよいと思います。それを再録の後に、司馬光の「資治通鑑」・「周紀二」にある論贊を掲げて、そこに挙げられた信に関する故事を紹介することにいたします。

子貢「政治の要諦をお聞かせください」

孔子「食糧を十分にし、軍備を固め、人民に信頼（又は信義）の心をもたせることだ」

子貢「もし、やむを得ず三つのうちいずれかを捨てるとなると、どれを先にしますか」

孔子「軍備を捨てる」

子貢「では、食糧と信頼の心のうち、いずれかを捨てるとしたら、どれを先にしますか」

孔子「食糧を捨てる。昔より、人はいつかは死ぬと決まっている。『信』が無ければ人間でなくなる」(顔淵第十二の七)

<司馬光曰く、そもそも信は、人君の至宝である。国は民によって保たれ、民は信によって保たれる。信に非ざれば以て民を使うなく、民に非ざれば以て国を守るなし。この故に、古の王者は、四海を欺かず、覇者は四隣を欺かず、善く国を治める者は、その民を欺かず、善く家を治める者はその親を欺かず。

善からざる者はこれに反し、その隣国を欺き、その百姓を欺き、甚だしき者は、その兄弟を欺き、その父子を欺き、上は下を信ぜず、下は上を信ぜず、上下、心を離し、以て敗れるに至り、利益があったとしてもその傷つく所を癒すことができず、獲る所はその失う所を補うことができない。豈に哀しからずや。

昔、齊の桓公は曹沫^{そうぼつ}の盟に背かず(注1)、晉の文公は原を伐つ^{げん}の利を貪らず(注2)、魏の文侯は虞人の約束を棄てず(注3)、秦の孝侯は木を移すの賞を廃せず(注4)。この四君は道德的に皆が皆、純白というわけではない。特に秦の孝侯の宰相であった商君は最も刻薄と称され、又、戦乱の世にあって天下総てが権謀術数に趣く時勢に尚敢えて信を忘れずして、以てその民を養った。いわんや四海治平の政を為す者が信を重視せずにおられようか、と。>

注1：齊の桓公は曹沫^{ちかい}の盟に背かず(「史記・齊太公世家」)

齊が魯を伐って、魯が將^{まさ}に誓文に盟^{ちか}おうとした。突然、魯の曹沫^{そうぼつ}が匕首^{あいくち}を以て桓公を壇上に脅かし、曰く、『魯の侵地を反せ』と。桓公はこれを許した。それを聞いて曹沫は匕首を捨てて北面して臣の位に就いて座した。桓公は後になって後悔し、魯に地を与えずかつ

曹沫を殺そうとした。管仲曰く、『先には脅かされて侵地返還を許し、後に悔やみ、信に背いてこれを殺すのは、殿の小さな満足を得るだけのこと。しかし、それをやれば信を諸侯に棄て、天下の援^{たすけ}を失うことになるでしょう。やってはいけません』と。桓公は管仲の諫言を聞き入れて遂に曹沫が三たび敗れて失った所の地を魯に与えた。諸侯はこれを聞き、皆齊を信じて所属したいと願った。

注2：晉の文公は原^{げん}を伐つ^{くた}の利を貪らず（「春秋左氏伝」（僖公二十五年））

冬、晉の文公、原を囲み、三日の糧を命ず。原降らず。命じて軍隊を去らせた。間諜（敵に潜り込ませたスパイ）が出でて曰く、原將に降らんとす、と。軍吏曰く、請うこれ待たん、と。文公曰く、「信は国の宝なり。民の庇^{おおわ}はる所なり。原を得るも信を失はば、何を以てこれを庇はん。亡^{うし}う所^{ますます}滋々多いからん」と。一舎（三十里）を退きて原降る。（前出）

注3：魏の文侯は虞人の期（約束）を棄てず（「資治通鑑」・周紀一）

魏の文侯が群臣と酒を飲んで楽しんでた。時に雨が降ってきた。すると馬車を命じて野にゆこうとした。左右曰く、「今日、酒を飲んで楽しみ、天又雨降る。君將にどこにいこうとされるのか」と。文侯曰く、「私は虞人と獐を約束した。酒を飲んで楽しむと雖も、彼と約束したことを無にするわけにはいかない」と。雨中を走り、文公自身の口で狩の中止を告げた。

注4：秦の孝侯は木を移すの賞を廃せず（「史記」商君列伝）

商君（商鞅）が曰く、「世を治めるには一道とは限りません。国に便利ならば古法に従う必要はありません」と。孝侯曰く、「善し」と。そこで法令を改変した。（中略）法令の文案は既に完成したが未だ布告しなかった。人民が新しい法令を信じないことを恐れたからである。そこで三丈の高さの木を国都の市の南門に立てて、民に懸賞募集した。「この木を移して北門に置く者があれば、十金を与えよう」と。民はこれを怪しみ、敢えて移す者はいなかった。そこで再度募集した。「この木をよく移す者には五十金を与えよう」と。一人の者が木を移した。すると約束通り五十金を予えた。嘘でないことを示したのである。このことがあってから、人々が発令を信ずるようになったので、新しい法令を布告実施した。

「論語」には以上のような、「民は信なくんば立たず」（顔淵篇）や、「君子、信ぜられて後にその民を勞す（使役する）」（子張篇）といった政治を司る為政者側からの「信」の重要性を説く他に、匹夫匹婦に至る人たるもの総てにそれが欠かせぬことや、朋友との交わりにおける「信」は日々の三省すべき事項に掲げられるべき重要徳目である、としていま

す。

子曰わく、「人として信義がなければ、うまくやっていけるはずがない。大車（牛車）にながえ轅の端の横木が無く、小車（四頭立て馬車）に轅のくびき止めがないようでは、牛馬を繋ぐこともできず、動かすことができないのと同じだ」と。（為政第二の二十三）

曾子曰わく、「吾れ日に三たび吾が身を省みる。人の為に謀りて忠ならざるか。朋友と交わりて信ならざるか。習わざるを伝えしか」。（学而第一の四）

「信」は心と言葉が一致する「まこと」の意。又、有子が「信（約束を守ること）は、正義に近づけば、言葉通り履行できる」（学而篇）と言うように、義と関連深い徳目です。孔子は「文、行、忠、信」の四つ、すなわち学問（読書）、実践、誠実、信義を教育の重点とした、と述而篇にあります。「忠」は心が体中に充実する「まごごろこめた」の意、すなわち「忠信」とは心と言葉が誠実であることです。

「信」や「忠信」は、現代人の我々にとって喪失しつつある危機的徳目の最たるもので、君子たるものが原点回帰して復古すべき善徳です。ただし「狂信」や「妄信」そして子路篇で孔子が指摘する「こうこうぜん輕然たる小人」や、「莊子」にある「びせい尾生の信」には陥らぬ冷静さを伴った修養が肝要であると思います。

子貢「どのようであつたら士人と言えますか」

孔子「我が身の振る舞いに恥を知り、四方に使いして君命を恥ずかしめないようなら士人と言えよう」

子貢「なおしいてその次を言えばどうでしょう」

孔子「一族からは孝行者といわれ、郷里からは悌順だといわれる者だ」

子貢「なおしいてその次を言えばどうでしょう」

孔子「言必ず信、行必ず果、こうこうぜん輕然たる小人なるかな。でも三番目であるとしてよい」

子貢「今の政治家たちはどうなりますか」

孔子「ああ、としやう斗筭の人（つまらぬ人）、何ぞ算うるに足らん（比較の対象外だ）」（子路第十三の二十）

「言必ず信、行必ず果、こうこうぜん輕然たる小人なるかな」とは、「言えれば必ず信頼がもて、行動は必ず果敢である人はコチコチの小人だね」という意味です。この言葉の言わんとする真意は「孟子」の、「大人は言必ずしも信ならず、行必ずしも果ならず。ただ義の在るところのみ」（離婁下篇）にあります。すなわち、「信」や「行」にも臨機応変、融通性といったものが必要で、義として為さねばならぬ必要がないことにも、信義を守るのだ、果敢に実践するんだとあまりにコチコチではいけない、と言っているようです。

孔子学派を比喻的に揶揄した「莊子」(盗跖篇)に、^{びせい}尾生という男が女と橋の下で待ち合わせの約束をしたが、女は来ない。大雨が降り続いて増水してきたのにそれでも待ち続けて遂に溺死した、という話が載っています。「^{びせい}尾生の信」といって、「^{こうこうぜん}涇涇然たる小人」の代表格でしょう。「言必ず信」もここまできると愚直に過ぎます。後述する「中庸」が大切だ、ということです。

それにしても「**朋友と交わりて信**」は、現代人の病むところです。政治やあらゆる組織における上位者への不信は加速度を増し、近隣や朋友に至るまで不信現象が蔓延して社会を閉塞させています。せめて今、朋友の信くらいは望むべくもないのだろうか。「管鮑の交わり」は遠い過去の仮想的現実だったのだろうか。「信」の徳の最後に、我が国の上田秋成の名作「菊花の約(ちぎり)」を添えて朋友との信の復活を願い、一旦この章を締めることにします。

＜青々たる春の柳、家園(みその)に種(うゆ)ることなかれ。交わりは軽薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹くに耐えめや。軽薄の人は交わりやすくして亦速やかなり。楊柳いくたび春に染むれども、軽薄の人は絶えて訪(とむら)ふ日なし。

播磨の国で^{はせべ}丈部左門とその母親に、旅の途中で病に倒れ、懇切な手当てを受けた出雲の国の武士^{あかな そ うえもん}赤穴宗右衛門は、日増しに募る交誼の情もだしがたく、遂に左門と義兄弟の杯を交わし、傷が治ると九月九日の重陽の佳節に再び帰ることを約束して一旦国許に戻った。月日はまたたく間に過ぎ、下枝のグミの実も赤く色づき、垣根の野菊も色鮮やかに咲いて、やがて九月になった。

九日の朝、左門はいつもより早起きをして家を掃除し、黄菊白菊を小瓶にさし、精一杯のご馳走を用意して宗右衛門を待った。商人が、武士が、馬方が左門の家の前を話しながら通り過ぎる。やがて月が山の端に沈み、もう来ないかと戸を閉めようとした時、ぼんやりと暗闇に人の影がある。風に漂いながら近づく姿をよく見ると赤穴宗右衛門ではないか。驚喜してささと中に向かい入れようとする左門を制して、おもむろに宗右衛門は語った。

「実は自分はこの世の人間ではない。もと出雲は佐々木氏綱の領国で、私も氏綱の配下の者だが、国に戻ってみると^{あまこつねひさ}皆尼子經久方に寝返っていた。私は經久に仕える気がないので、貴君との約束があるからと言って去ろうとしたら、捕らえられ牢獄に入れられた。とうとう今日まで経ってしまった。男同士の固い約束を反古にはできぬ。『人一日に千里をゆくことあたはず。魂よく一日に千里をもゆく』の古人のことわりを思い出し、自ら刃で我が命を絶ち、菊花の約(ちぎり)を果さんとてきたのだ」と。 将に「**信、義に近づけば、言復(ふ)むべし**(約束を守ることが、正義に近づけば、言葉通り履行できる)」。